

ホーソーンの Young Goodman Brown の顔

松 山 信 直

I

1835年に発表されたナサニエル・ホーソーンの短篇“*Young Goodman Brown*”（以下“YGB”と略す）は、“*Rappaccini's Daughter*”と並んで多様な解釈を生み、論議をひき起してきた作品である。「この作品はダンテほど深い作品だ」と言ったハーマン・メルヴィルや、ホーソーンのアレゴリー好みを批判して、このような作品の「神秘主義」は避けた方がよいと忠告した E. A. ポー²などの、同時代人の対立する批評以来、ホーソーンを書物の形で論じた人は、多少ともこの作品や主人公の Brown について、何か新らしいことを一言言うのが常であったし、また、この作品だけをとりあげて論じた論文もかなり多くにのぼっている。T. E. Connolly が編集した、*Nathaniel Hawthorne: Young Goodman Brown*³には、作品のテキストと共にめばしい批評の大半が収められていて、Fogle の Ambiguity 論、Crews の Escape 論、“Specter”説の Levin 論文、墮落した想像力説の Hurley 論文などが、容易に比較検討できる。また、この書物の“Additional Reading”は、ここに収録しなかった研究、批評の書誌であって、この書物は、出版された1968年までの“YGB”研究の俯瞰を与える便利な資料である。1968年以降の研究には、数点を除けばさほどめばしいものがないので、“YGB”の研究批評は、この便利な書物をふまえるところから出発すると言ってもよい。

ところが、従来の“YGB”論には、主人公 Brown のいくつかの顔が無視、

もしくは、軽視されていた。もともとこの作品には、Brown の具体的な身なりや風貌についての描写は何もないし、彼の具体的な顔についても、何一つ語られていない。しかし作中人物の Brown には、彼を identify する顔が明らかに存在する。それはちょうど、パスポートや身分証明書にはりつけた顔写真がわれわれを identify するのと同じである。ただ Brown の顔は作品を通して描きだされ、また作品によって理解されるものであって、顔写真のように単に実物と較べたら分るといった代物ではない。またこの顔は一つでもない。この顔は言うまでもなく比喩的な顔であり、また、状況から与えられている顔であって、いくつか集って彼を identify するのである。

たとえば、Brown の顔は *The Marble Faun* の Hilda の裏返しの顔である。暗い一生を送った Brown の墓石には誰も “hopeful verse” (p. 163)⁴ をほらなかつたが、*The Marble Faun* の Hilda は、これとは逆に “hopeful soul”⁵ を持っていて、山の頂きに陽光を見るのである。Hilda は自分の清純さだけを守って、罪の汚れに苦しむ友人 Miriam を拒否するピューリタンである。他人の悪に厳しく、善悪の ambiguity を巨視的にとらえ得ないという点で、彼女は本質的には Brown の妹と言ってもよい。彼女なりの偏狭な完全主義は、あとでふれるが、Brown の独善的な厳しさに通じてもいる。だが、Hilda は純白なものにとりまかれて “hopeful” であり、Brown は森の暗闇に入りこんでしまって、結局最後には “gloom” (p. 163) に包まれた死を迎え、誰も “hopeful verse” を捧げてはくれなかつた。本質的なつながりを持ちながらも、Hilda と Brown の顔を全く相反する裏表のものにしたのは、二人の信仰のあり方と道徳的清純さの違いであった。とにかく、Brown はこのような、「Hilda の裏返しの顔」を持っているのである。

さらにもう一つ例をとってみると、Brown には「母の子としての顔」がある。Brown が森の中の Witches' Sabbath に行きついて、Devil の会衆の前に歩み出た時、故人となっていた父の姿が彼を手招きしているように思えたが、一方、母らしい人の姿は、彼に近づくなと警告するかのような身振

を示した。(p. 160) 集っている会衆はすべて彼を歓迎している (the smile of welcome gleamed darkly on every visage.) (p. 160) のに、この母らしい人の姿だけが権威者的に近よるなという身振を示すのである。

Brown は妻 Faith を “a blessed angel on earth” (p. 150) とみなし、彼女に従うことによって最終的には救われようと考えている。また、森の中で姿を見た Goody Cloyse は “a very pious and exemplary dame” で、彼の幼い頃に教義問答を教えてくれた人であり、彼女は今なお、牧師や Deacon Gookin と共に “his moral and spiritual advisor” であった。(p. 153) Brown はこのように自分に身近な妻 Faith をも、また Cloyse をも、自分を導く権威として信頼し、尊敬していたのだが、森の奥で見かけた母らしい姿は、Brown に権威を認められた者のごとくに、彼に向かって警告の身振りを示すのである。もちろん、妻 Faith でさえもがこの森の奥の深夜の Witches' Sabbath に来ているとかたく信じるようにさせられていた Brown の精神状態では (cf. Faith の叫び声とピンクのリボン)、この警告は無意味であった (he had no power to retreat one step, nor to resist, even in thought. (p.160)。けれども、母もまた Faith や Cloyse と同じく、Brown にとっては信頼と尊敬の権威であって、その立場から警告の身振りが Brown に対してなされた、いや、見方をかえれば、警告の身振りをしている人が母のように Brown には想えた、と考えることができる。Brown には明らかに「母の子としての顔」があるのである。そして、若い妻 Faith も、かなりの年令の Cloyse も、Brown にとっては世代的に異なった母の延長なのである。だからこそ Brown は二人にそれぞれ依存するのである。Brown が R. P. Adams の言うように、成長し得ない人間ならば、(his failure to grow up, in the sense of becoming emotionally mature)⁶、それは Brown の母の子としての態度に大きくかかわっていると云わねばならない。彼には、母もしくはその代用物、あるいは、延長、を権威として受け入れ、これに依存しようとする子としての Brown、という顔があるのである。

これまた従来から軽視されていると思えることの一つである。Brown があのかたくなといえるほどの暗い “distrustful” (p. 163) な人間になったのも、疑惑故に子供が味った、偶像、もしくは、権威の失墜がからんでいるからである。

II

ホーソンはピューリタンを素材にした作品をいくつか書いたが、その多くはかなり史実を忠実にふまえた歴史的情況設定を持っている。“YGB” の場合もそうであって、Brown には歴史的情況から与えられている顔が二つある。

“YGB” は、仮空の主人公を登場させてはいるが、非常に明確な歴史的情況設定がある。それはこの作品の舞台になっている Salem village で1692年に起った魔女事件である。“YGB” に魔女に関するさまざまな伝説・迷信、あるいは、Salem village の事件に関する記録がとりいれられていることはすでにかなり指摘されてきた。また、先にふれた Goody Cloyse は、作中で言及のある Martha Carrier, Goody Cory と共に、当時魔女として裁かれた実在の女性であった。彼女は1692年の魔女騒ぎが終った時にはまだ牢獄につながれていたが、Martha Carrier は同年8月19日に魔女として処刑された。また、Goody Cory は、1692年3月から魔女だと騒がれた女性で、審問され裁判にかけられて、9月22日に Gallows Hill で処刑された女性である。その他、魔女もしくは魔女事件と“YGB” のつながりは Daniel Hoffman, David Levin などが詳しく論じている。⁸ 当時、William IIIから得た新しい Charter にもとづいて、Increase Mather の推薦によって植民地の総督に Sir William Phips が任命されていた。Robert Calef の *More Wonders of the Invisible World* によれば、この Phips の妻も魔女の集会に出ていたという噂があった。⁹ ホーソンは作中で “Some affirm that the lady of the governor was there.” (p. 159) と書いている。このようなほとんど眼につか

いところでも、ホーソーンは噂なり史実を押えて歴史的情況の設定を積み重ねているのである。

先に言及した Goody Cory について、Goody Cloyse が自分のほうきは“that unhangd witch, Goody Cory” (p. 153) に盗まれたのだらうと言っている。この言葉から敢て推測すれば、この作品の舞台になっている時期は N. F. Doubleday が言っている“probably in 1691”¹⁰ではなく、また、Daniel Hoffman が言っている All Saints' Eve の10月31日でもなく、¹¹ Goody Cory が魔女だとして騒がれた1692年の3月から、処刑された9月までの間のある夜ということになる。そういえば、Brown の森の中での深夜の出来事について、寒さに関する言及は何もない。さらに、森の中で悪魔が集会を開くのは、特定の日の夜だとされていたのであるから、3月と9月の間の特定のそのような日、たとえば、Walpurgis Night の May Day Eve, Good Friday の夜、Midsummer Eve (6月23日)、又は Lammass Eve (7月31日)などを考えてみることができる。

具体的な日付はともかくとして、大切なことは、主人公の Young Goodman が、魔女事件の渦中にあった年の Salem village の住人で、森の中で Brown が見聞したのは悪魔の術による Specter だということである。Salem village の魔女騒ぎは、Samuel Parris の黒人奴隷 Tituba が魔女の話やうらないを少女たちに教え、そのためにこの少女たちが神経症的な情緒不安定と思われるものに陥ったことから拡がった。そしてこの少女たちは、誰それの Specter が現われて自分達を苦しめたと告発して、数多くの人々が次々と審問された。悪魔は罪のない人の姿をとることができないから、Specter になった人は悪魔の手先か魔女だと考えられた。そして裁判では、この Specter が魔女もしくは悪魔の手先の疑う余地のない証拠として採用され、多くの人が魔女だと断定されたのであった。

作品中では、Brown が深夜の森の中で Goody Cloyse の姿を見たり、日常尊敬する牧師や Deacon Gookin の声をきくばかりでなく、森の奥の

Witches' Sabbath では、村の悪名高い人だけでなく、町の立派な人々も姿を見せ、自分の父も母も、また妻の Faith も集っており、先に言及した「総督の夫人」も来ているという噂もあった。Brown は、Faith と共に悪魔の祭壇に近づいて洗礼を受ける直前になって、“Faith, Faith,……look up to heaven, and resist the wicked one” (p.162) と叫ぶ。そのとたん、眼前の悪の洗礼式の情景は消え、彼は真暗な森の中に一人いるのを知った。

Had Goodman Brown fallen asleep in the forest and only dreamed a wild dream of a witch-meeting? (p.162)

とホーソーンは書いている。つまり、Brown が森の中で経験したのは夢だろうか、というのである。

E. A. ポーがこの作品の神秘主義を攻撃したのは、この経験の曖昧さの故であった¹²。一方、この曖昧さが様式上の統一と調和している為に注意を喚起したのは Fogle であった。¹³ これに対して David Levin は、Brown が森の中で見聞した人の姿や声、物音、魔女の祭典等は、悪魔によって作り出された Specter だと論じた。¹⁴ いわゆる Specter 説である。ホーソーンは Salem village の魔女裁判で Specter が証拠として採用されたことはよく知っていた。“Main Steet” の一節で、この事件の被告となった John Procter とその妻 Elizabeth について次のように書いている。

Procter and his wife have shown their withered faces at children's bedsides, mocking, making mouths, and affrighting the poor little innocents in the night-time. They or their spectral appearances, have stuck pins into the Afflicted ones, and thrown them into deadly fainting-fits with a touch or but a look.¹⁵

Specter 説を支える設定はたしかに作中に沢山ある。それらについては、Levin とその亜流の人たちがすでに論じているので、ここで改めて論じる必

要はなかるう。ただ注目しなければならないのは、Brown が森の中で見たものが Specter であるにしても、Salem village の魔女事件の Specter と Brown が見た Specter とは本質的に異っているということである。Salem village の Specter は村の全員のものではなく、一部の人のものだけが若干の人に見えたのであり、先に引用した Procter の場合のように、それを見た人を苦しめた。ところが、Brown の見た Specter は、彼を驚かしはしたが、必ずしも彼を苦しめたり、おびえさせたりするものではなかったし、先に触れたように、彼が尊敬する人々のすべてと植民地の高官や教会の立派な全員の多数も含まれていた。Brown が悪魔と森の中で会って、会う約束を果したからこれ以上森の奥へ行かないと悪魔に言う度に、彼の信仰を支えていた人が次々と深夜の森に姿をあらわし、彼のよりどころがくずれていく。悪魔がそのように Specter を出現させて Brown の尊敬・依存の対象をくつがえし、彼の faith をきりくずしていったと考えられるのである。

魔女騒ぎの最中の Salem village の村人たちの心には、いつどこで誰が自分の Specter を見たと言いつくすかも知らないという不安が、恐らく日増につのっていったことであろう。しかし、その一方では、あの人も魔女ではなかるうかという不信と疑惑が、人々を重苦しく包んだことも想像に難くない。Brown の森から帰ったあとのあの暗い一生、つまり、尊敬するものに疑いが生じ、物事の表面だけを信じることができなくなり、“hopeful” とはいえなくなった一生を送った Brown は、別の意味での Salem village の事件の犠牲といえるのであろう。ホーソンは Specter を Brown の森での経験にかぶせたばかりでなく、魔女騒ぎの渦中に陥しいれられて、人を疑惑の眼で見るような精神状態になった Salem village の住民、という設定を Brown に与えたのである。Specter を見、彼が尊敬し依存していた偶像の如き人たちの実体を信じ得なくなって、疑の眼でしか見れなくなった Brown の顔は、正しく魔女騒ぎの渦中に投げこまれた「Salem village の村人の顔」であった。

III

この作品の物語の大半が、Devil の説得、すなわち、誘惑、のプロセスと、Brown の反応、すなわち、心理的葛藤、からなりたっていることはたしかであるが、なぜ Devil が彼を幻覚によって誘惑したのか、その理由ないしは情況が明確にされない限り、物語の大半を占める幻覚による誘惑と心理的葛藤は、単なる心理学の一つのケース・スタディーに終わってしまう。そして歴史的情況をおさえていたホーソンの歴史意識は全く無視されてしまうことになる。言葉をかえて言えば、なぜ Brown は Devil と森で会う約束を交したのか、なぜ Devil が彼に Specter を見せ、Brown の Faith がくずれたのか、なぜ Brown の不信と疑は、彼の一生を包みこむほど大きく深かったのか、これらの間に対する答が充分なされない限り、この作品はポーの言うような「神秘主義」の作品、あるいは、単なるロマンス、または心理的象徴劇に終わってしまう。*The Scarlet Letter* が単なる「神秘主義」の作品でもなければ、単なるロマンス、または心理的象徴劇でもないことは衆知の通りである。*The Scarlet Letter* はたしかにリアリズムに反する要素をふんだんに持っているが、作品のリアリティーは、ホーソンの歴史意識に裏付けられた歴史的情況によってしっかりと支えられているのである。それと同じように、この“YGB”も歴史的情況によってしっかりとリアリティーが支えられているのである。それを端的に示しているのが、歴史的情況によって与えられている Brown のもう一つの顔、すなわち、「三代目のピューリタンの顔」である。

“YGB”におけるピューリタニズムの問題を論じた人は少なくないし、またピューリタンとしての Brown を論じた人も少なくないが、主人公 Brown が三代目の平信徒だ、という設定を重視した人は殆んどいなかった。これまた Brown の重要な顔が無視、もしくは、軽視されてきたのである。

作者ホーソンはわざわざ Brown に祖父と父とに言及させ、Devil にそ

れを反論させる形で祖父と父の時代を明確にして、主人公が三代目のピューリタンだという設定を確立している。Brown によれば、祖父も父も正直な人間で善良なキリスト教徒だと言うが、Devil に言わせれば、そうではない。

I helped your grandfather, the constable, when he lashed the Quaker woman so smartly through the streets of Salem; and it was I that brought your father a pitch-pine knot, kindled at my own hearth, to set fire to an Indian village, in King Philip's war. (pp. 151-2)

Devil がここに描いてみせる祖父や父の姿が真実であるかどうかは別として、祖父は1656年にはじめてニューイングランドに来た Quaker にかかわり、父は1675-76年の King Philip との戦に参加し、そして、今 Brown は1692年の Salem village の住人として三代目のピューリタンである。この設定は、決して軽視されるべきではないように思える。初代、二代、三代の時代を極めて明瞭に示して、Brown が三代目であることを強調しているからである。表題にわざわざ“Young”とことわっているのもそのためである。

この1692年当時といえば、先に一言触れた Increase Mather が、Sir William Phips を総督に立てて New England の実力者になる頃である。Increase は Richard Mather の息子で、この頃53才の二代目であった。そして、その息子の、三代目に当る Cotton Mather は30才になり、すでに、魔術の犠牲者となった少女を観察研究して、*Memorable Providences, Relating to Witchcrafts and Possessions* (1689) をあらわし、父のあとに続く指導者として頭角をもたげていた。これに対して Young Goodman Brown は、三代目であっても Cotton Mather よりはかなり若く(20才を若干出た位か?)、*“Goodman”* と呼ばれているところからみれば、いわゆる gentleman 以下の階層の一家の主人で、決して指導者でない身分であった。本人に言わせれば、“a simple husbandman” (p.152) である。

“Goodman”とは言うまでもなく一種の敬称であって、イギリスの gentleman 以下の自作農・小地主の間で、中世末期から近世にかけて、一家の主人が非公式に互に親しく呼び交す際に用いられていた。ピューリタンもこの敬称を用いており、E. A. Robinson によれば¹⁶、1632年に Plymouth の植民地で、“unregenerate man”を“Goodman”と呼ぶのはおかしいという論議が起り、当時の指導者の一人 John Winthrop に相談したところ、民間で習慣的に用いてきた呼び方を改める必要はないと答えたそうである。もちろん Devil に誘われて森の中で彼と会うような Brown は、必ずしも善良な人間でも、模範的な人間でもない。それだけに、作中でいつも Goodman Brown と呼ばれ、自らをも Goodman Brown と呼んでいるのは、たとえ“Goodman”という呼称が歴史的なものであっても、非常にうつろに響く。外見と実質のへだたりは、Specter の姿を見せる村人だけでなく、Brown の問題でもある。そしてこのことと、彼が三代目のピューリタンであることとも結びついているのである。

ホーソーンが初期のピューリタンと二代目三代目を峻別していたことは、いまさら言うまでもない。今この問題に深く立ち入る余裕はないが、Salem の歴史を点描した“Main Street”によって、ホーソーン自らに語らせてみよう。

ホーソーンは初代のピューリタンを、「厳しくて厳粛で寛容を知らなかったけれども、迷信的ではなく、狂信的ですらもなく、その時代のどの人にも劣らず遠くを見すかすこの世の賢明さを授かっていた」¹⁷と評価する。もちろん、彼らの熱烈な信仰が高く評価されたことは言うまでもない。

「ピューリタン達の神をうやまう建物には、彼らの儀式と同じように、飾り気がなく、単純で、厳粛だった。けれども、生きかえった信仰の熱意は、彼らの心の中でともしびのように燃え、彼らのまわりのあらゆるものをその輝きで豊かにし、新らしい壁や狭い面積を大伽藍にかえてしまい、靈的神秘と経験に自らなっているのである。聖なる建物や、ステンドグラスの絵のはまった窓や、オルガンの壮大な神々しさは、かけはなれた不完全な象徴でしかあり得ないのである。彼らのともしび

が、天の炎で生き生きと燃えている間は萬事うまくいった。しかし、しばらくして、彼らの時代、もしくは彼らの子供の時代になって、このともしびのもえ方が薄暗くなり、また、本物の輝きが失われてきた。その時彼らの制度が何と堅く、冷く、かつ狭少になっていったと見えたことか、また、彼らが自由と呼んだものが鉄のおりの如くになっていったと見えたことだろう」¹⁸

またホーソーンは別の箇處で、「これらの〔二代目・三代目〕の特色〔religions gloom と counterfeit of the religious ardor〕は、本来の靈的な源泉から生じたのではなく、他の人間の模範と訓戒からうけ継いだものであるだけに、必然的に、偽善と誇張の形をとった。最初の植民者たちの息子や孫たちは、先祖よりは低い狭い魂の持主である人々だった」¹⁹と書いている。

このようにホーソーンが説明する二代目・三代目のピューリタンの特色はそっくりそのまま Brown にあてはまる。Brown は Devil と森の中で会う約束を交した。彼はそれが悪であることを充分承知しておりながら、その約束を果すために、夜出かける目的を妻 Faith にかくして森へ行った。先に触れたように、彼が正直でないことも、また、善良なクリスチャンでないことも明らかである。だが彼は墮落しきった悪人ではない。森で Devil と会うと、会う約束を果したからもう帰ると Devil に告げる。そして、自分の祖父も父もこんな目的で森に来たことはない、自分の一家は正直で、善良なクリスチャンだった、と先祖が立派であったことを引き合いに出し、その立派な一家の一員としてはこれ以上先へは進めない、と言う。また、Devil と先へ進んだら、Salem village のあの善良な老人であるわれわれの牧師と眼をあわすことができなくなる、とも言う。

“We have been a race of honest men and good Christians since the days of the martyrs; and shall I be the first of the name of Brown that ever took this path and kept”—— (p.151)

“But, were I to go on with thee, how should I meet the eye of that good old man, our minister, at Salem village?” (p.152)

Brown は、一言で言えば、先祖や牧師は立派なクリスチャンだ、彼らに対して恥しいからこれ以上先へ進めない、というのである。つまり、彼は自分の行為の正しさそのものを問題にするのではなく、他者を規範にして自分の行為を律しようとしているのである。それは子供が、自分の行為の正邪・適不適そのものを考えずに、叱られるから止めよう、とか、誰もとめなかったからやった、などと言うのと同じである。先に Brown に「母の子としての顔」があると言ったが、その顔と、この内発的でなく他律的な善悪観をもつ「三代目のピューリタンの顔」とは、二重写しになっているのである。

全く同じことが、信仰の問題についても言える。Brown は約束を交して悪魔と森で会うことが悪であると認めながらも、先に一部を引用したように、妻 Faith にひっかけて、自分には信仰があるから最後的には救われると考える。

“Well, she’s a blessed angel on earth ; and after this one night I’ll cling to her skirts and follow her to heaven.” (p.150)

Faith という名の妻の比喩的な意味をふまえて Brown のこの言葉を言いかえれば、「自分には信仰がある。だから、たとえ今晚森へ行って悪魔と会っても（つまり、悪を犯しても）、単に会うだけで、しかも、今回限りのことであるから（つまり、とっぷり悪にひたる気は全然ないから）、自分が破滅する筈はない。今後は信仰を守って救われるのだ。」ということになる。ここにも、権威に依存して安心する「母の子としての顔」(Faith は先にのべたように母の代用、もしくは延長である)がみえていると同時に、内発的な信仰や神の前における正しさを考えずに、ただ信仰は外から与えられ、救は保証されていると全く自己本位に過信している「三代目のピューリタンの顔」がある。先にひいたホーソーンの言葉を用いると、Brown の信仰の「ともしびのもえ方」は「薄暗くなり」、「本物の輝きを失って」いるのである。彼の信仰は受身的であり、J. S. Mathews によって、“insubstantiality of

Brown's religions faith”²⁰ と評されたのも当然であろう。Brown は、自己の内にあかあかと燃える内発的信仰によって神の前における正しさを貫き、思慮による救いを確信した、いわゆる“visible saint”としての自覚にあふれた初代のピューリタンではなく、信仰を喪失したとは言えないまでも、少なくとも形骸化した信仰におぼれ、善悪感が他律化してしまった三代目のピューリタンなのである。だからこそ、彼は悪に誘われ、疑惑の世界に迷いこんでしまったのである。しかもそれでいて、彼は他者に対する厳しさだけは貫くのである。

当時のピューリタンの植民地でさかんになってきた「半途契約」(half-way covenant) は、E. S. Morgan が指摘したように²¹、必ずしも信仰のおとろえや、ピューリタンの植民地を創設した初代の人々が定めた規範を裏切るものではないにしても、神の前における清浄さや回心体験の重要性についてかたくなだったピューリタンの考えが、重大な転回点に達したことを示すのは事実であろう。信仰がおとろえた、と言い切れないにしても、信仰のあり方が大きく変ってきたのは事実であろう。二代目・三代目と世代が移るにつれて、New England の人々の関心そのものが大きく変革していったのである。歴史の詳細に立入る余裕はないけれども、初代のピューリタンがめざした「岡上の町」²²の目標は、ヨーロッパ、ことにイギリスにおける政治的変革の結果、観客を期待するモデル社会の建設ということから大きく後退せざるを得なかったし、また、植民地に生じてきた政治的、経済的関心の高まり、物質的繁栄への志向が、宗教・道徳への関心をゆるめていったことも事実であろう。さらにその上、天災やインディアンとの不和などの問題もあった。従って、神の王国建設の意欲に燃えた初代のピューリタンとは異なって、二代目の人々—特に、牧師等の指導者層—には深い動揺と歎きがあった。このことを、Perry Miller は1660年代、70年代の Election Sermon の表題を列挙して説明し、²³ そして、「1680年頃までに……歴史はニューイングランドについて、創設者たちは偉大であったが、その子供達と孫たちは

漸次墮落していったと記録するように思えた」²⁴ と書いている。同様の墮落の歎きは、1680年代の書物の表題によってもうかがうことができる。²⁵

二代目のピューリタンの指導者 Increase Mather が 1679年に Boston で開かれた宗教会議の結果をふまえて書いた *The Necessity of Reformation* は、12の項目をたててニューイングランドの人々につのってきた悪を指摘し、その改善、改良をきびしく勧告した。²⁶ ホーソーンが先に、信仰のともしびが暗くなっていった時、彼らの制度が堅く、冷く、狭少になってゆき、「自由」と呼んだものは鉄のおりのごとくになった、と言ったのも、この二代目・三代目の指導者たちが、外からの規制やいましめを強化することによって自分達の正当性を守り、組織と信仰を守ろうとしたことをふまえていたと考えることができる。逆に言えば、当時の指導者をやきもきさせ、悪を並べたてていさめるほど一般の信仰は変貌し、道徳のゆるみがみられたのだ、ということになる。

この書物に掲げてある当時顕著になってきた12の悪と、上に指摘した三代目としての Goodman Brown の問題点、あるいは、作中で Devil が人間のかくれた罪として描いてみせるもの (cf. p. 161) とは、何もかも完全に一致するのではないが、関係の深いものがいくつかある。たとえば、*The Necessity* では第一に、“a great and visible decay of goodness” があげられているし、若い者が夜に出歩く、とか、sex と酒の罪がまし、私生児が増すといったものがある。²⁷

Brown の罪は、彼が結婚3ヶ月であることに関連して、sex に関係すると解釈されることが多かった。たしかに、そのような解釈を示唆する事実はあるけれども、単に Brown が新婚だと言うだけでは、先に掲げた一連の問の答にならないことは明らかである。Brown が、sex に関するものであれ、何であれ、悪の誘いに屈し、それがために Specter を見せつけられ、そして疑惑にとりつかれてそれをすて切れなかったのは、彼が魔女事件当時の Salem village の住人であると同時に、上に見たように、形骸化した信仰と

弛緩した道徳の「三代目のピューリタンとしての顔」を持っていたからである。彼の信仰と道徳のあり方に、悪の誘惑に負け、偶像と権威の失墜を招く疑惑にとりつかれる原因があったのである。

だが、この作品は決して歴史小説ではない。つまり、ホーソーンはこの作品の意味を歴史の中に封じ込めようとするのでは決してない。言いかえれば Brown の顔は歴史的情况から与えられるもの以外にもあるのである。

IV

森の中の Devil の説教は、皮肉なことに、“Evil is the nature of mankind.” (p.161) という点では Puritanism の教義と一致する。しかし、Devil がこの認識を人間に持たせた上で約束する内容の点で、両者が非常に異なっていることは言うまでもない。その約束とは、W. J. Paulits が指摘したように二つある。²⁸ 一つは、かくれた悪についての知識を得る能力が人間に与えられること。もう一つは、悪が唯一の幸福となることである。前者は“By the sympathy of your human hearts for sin ... It shall be yours to penetrate, in every bosom, the deep mystery of sin ...” (p.161) という言葉に示され、後者は“Evil must be your only happiness.” (p.161) という言葉によって示されている。

悪を犯した人にはかくされている他人の悪が感知できるという設定を、ホーソーンは後年 *The Scarlet Letter* の中で用いた。第5章で、Hester について次のように書いている。

She shuddered to believe, yet could not help believing, that it [the scarlet letter] gave her a sympathetic knowledge of the hidden sin in other hearts.

そしてこの文章につづけて、“She was terror-stricken by the revelations that were thus made.”²⁹ と書いた。Brown が森の中で Devil によってみ

せられた Specter とは、彼が三代目のピニューリタンとして陥った悪の故に得られた “revelations” であったのである。ただ Brown にとっては、この “revelations” が、自分自身が悪に誘いこまれた故に得られたものであるだけに、真実かどうかの極め手が得られなかったのである。つまり、森の中の経験は Devil がただ見せてくれただけであって、決して真実でないといえるのか、それとも、真実として受けとらなければならないのか、そのどちらともきめかねる宙ぶりりん状態に彼はおかれたのである。

Brown は深夜の森に妻の Faith も来ていると確信して、“My Faith is gone.” (p.157) と叫んだ。そして “There is no good on earth; and sin is but a name. Come, devil; for to thee is this world given.” (p.157) と叫んではいるが、彼はその認識に徹し切ったのではなかった。悪の洗礼を受ける直前になって、先に引用したように、妻 Faith に向かって “Look up to heaven, and resist the wicked one.” (p. 162) と叫んでいる。Brown は決して、神への信仰をすてて悪の世界へ全面的にのめりこんだのではなかったのである。つまり、彼は悪魔の約束の第二点を受け入れたのではなかった。彼は三代目とは言うものの、依然としてピニューリタンであった。森から帰った時でも、Goody Cloyse が教義問答をしている少女を、「悪魔からひったくるように」(p.162) つれ去ったし、牧師の説教を聞いていても、この灰色の冒瀆者（と思われた牧師）と会衆の上に教会の屋根がおちてくるのではないかと恐れた (p.163) のである。だからこそ、その後の彼は “A stern, a sad, a darkly meditative man” (p.163) になったのである。つまり彼は神への信仰は失わなかったが、疑惑にとりつかれて他人への Faith を失った “distrustful” (p.163) な人間になったのである。ただその “distrust”, あるいは他人に対する厳しさは独善的であった。Brown には、自分が「悪い目的」と知りつつも悪魔に誘われて森に行ったことの自己批判が全く欠けているのである。神の前における自分の正しさを厳しく求めなかった点に、はじめにのべた Brown と *The Marble Faun* の Hilda との大きな違い、

“hopeful”な Hilde の明るさと “hopeful verse” を墓碑に書いてもらえなかった Brown の暗さととの差がある。また、Hester は他人が悪にそまっているような “revelations” を得ても、そのような “revelations” を得るほど自分が罪深いのだと考えたのに反して、Brown はそのような反省のない独善的な自己肯定の立場を守り、ただ厳しい疑惑の眼を他の人に向けただけであった。

だが、もし Brown が Devil の約束を二つとも受け入れていたならば、つまり、“Evil must be your only happiness.” (p.161) をも受け入れていたならば、Brown の最後の顔はゲーテの「Faust の顔」となっていたことであろう。ところが、第二の約束をうけいれず、神への信仰をたち切らなかつたために、彼は Faust になり切れず、悪への全面的な initiation をなしとげることもなかった。逆説的に言えば、徹底的に悪にのめりこまなかつただけに、彼には悪の実質についての徹底的な知識も体験も得られなかつたし、また、その知識と体験にもとづく大きなめざめも得られなかつた。ヤスバースの言う「悲劇的な知」³⁰ であるとか、真実の ambiguity の大局的な把握は彼にはなかつた。それだけに、彼はよりいっそう、Devil が約束した第一の事柄、かくされた悪についての “revelations” におそれ戸惑うのみであった。Goodman Brown の最後の顔は、「疑似的 Faust の暗い顔」であった。

ホーソンは、先祖の一人 John Hathorne が魔女裁判に関係していたり、また、この汚点ともいえる出来事と魔女の伝説がしみついた Salem を生れ故郷としていることもあって、魔女事件や魔女に非常に深い関心を持っていた。折にふれてあちこちの作品で魔女事件や魔女に言及するのはそのためであるが、“Main Street” では、約3頁にわたって、魔女事件にかかわった人々の点描を展開している。“YGB”は、この点からみれば、決して魔女事件そのものを描くのではなく、悪魔に誘われる（つまり、悪に誘惑される）とはどういうことなのかという問題を、歴史的情况を充分ふまえて、心理的・宗教的・道徳的な面が交る点でほりさげた作品である。すべてのすぐれた文

学作品がそうであるように、この作品も寓話とも象徴劇とも読みとることができるが、どのような読み方をするにしても、主人公 Brown がある特定の歴史的状況におかれ、その状況のもとで心理的・宗教的・道徳的ないくつかの「顔」をもっているという、作品に文字通り与えられている事実を押える必要があるであろう。ここに論じたのは、そういう Brown を identify する顔であることを改めて付言しておきたい。(1975.1.31)

注

- 1 Herman Melville, "Hawthorne and his Mosses," *The Achievement of American Criticism* ed. C. A. Brown (New York: The Ronald Press, 1954), p. 299.
- 2 E. A. Poe, "Hawthorne's Tales," *The Shock of Recognition* ed. Edmund Wilson (New York: Farrar, Strause, c1855), p. 169.
- 3 T. E. Connolly ed., *Nathaniel Hawthorne: Young Goodman Brown* (Columbus, Ohio: Charles E. Merrill, c1968). 以下 Connolly, *NHYGB* と略す。
- 4 Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown," *Selected Tales and Sketches* ed. & intro. by H. H. Waggoner (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1970), p. 163. 以下この作品からの引用は本文中に丸カッコに入れて示す。
- 5 Nathaniel Hawthorne, *The Marble Faun* ("Centenary Edition"), p. 462. Hilda については、次の論文ですでに論じた。[ホーソーンの Fair Lady—*The Marble Faun* の Hilda], 『季刊英文学』(あぼろん社) Vol. 5, No. 2.
- 6 R. P. Adams, "Hawthorne's *Provincial Tales*," Connolly, *NHYGB*, p. 56.
- 7 M. L. Starkey, *The Devil in Massachusetts; A Modern Enquiry into The Salem Witch Trials* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1961), pp. 207-9.
- 8 Daniel Hoffman, "Just Married! In the Village of Witches," Connolly, *NHYGB*. David Levin, "Shadows of Doubt: Specter Evidence in Hawthorne's 'Young Goodman Brown'," Connolly, *NHYGB*.
- 9 Cf. N. F. Doubleday, *Hawthorne's Early Tales; A Critical Study* (Durham, N. C.: Duke U. P., 1972), p. 204.
- 10 *Ibid.*, p. 204.
- 11 Daniel Hoffman, p. 81.
- 12 Cf. Note 2 above.
- 13 R. H. Fogle, "Ambiguity and Clarity in Hawthorne's 'Young Goodman Brown'," Connolly, *NHYGB*. 及び *Hawthorne's Fiction: The Light and The Dark*

- (Norman : U. of Oklahoma Press, 1952).
- 14 Cf. Note 8 above.
- 15 "Main Street," *Selected Tales and Sketches*, p. 540.
- 16 E. A. Robinson, "The Vision of Goodman Brown: A Source and Interpretation," Connolly, *NHYGB*, pp. 105-6.
- 17 "Main Street," p. 540.
- 18 *Ibid.*, pp. 531-32.
- 19 *Ibid.*, p. 540.
- 20 J. S. Mathews, "Antinomianism in 'Young Goodman Brown,'" Connolly, *NHYGB*, p. 114.
- 21 E. S. Morgan, *Visible Saints: The History of a Puritan Idea* (New York: New York U. P., 1963), pp. 138-9.
- 22 John Winthrop, "A Model of Christian Charity," *The American Puritans: Their Prose and Poetry* ed. Perry Miller ("Doubleday Anchor Books"), p. 83.
- 23 Perry Miller, "Errand into the Wilderness," *Errand into the Wilderness* ("Harper Torchbooks"), p. 2. 次のような説教が掲げている。John Higginson: *The Cause of God and His People In New England* (1663), William Stoughton: *New England's True Interest, Not to Lie* (1668), Thomas Shepard: *Eye-Salve* (1672), Urian Oakes: *New England Pleaded With* (1673), Increase Mather: *A Discourse Concerning the Danger of Apostasy* (1677).
- 24 *Ibid.*, p. 7.
- 25 Perry Miller, *The New England Mind: From Colony to Province* (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1962), p. 38. 次のようなものがある。Samuel Willard: *The Only Sure Way to Prevent Threatened Calamity* (1682), Samuel Torrey: *A Plea for the Life of Dying Religion* (1683), William Adams: *God's Eye on the Contrite* (1685)
- 26 Cf. Perry Miller, "Errand into the Wilderness," p. 7.
- 27 *Ibid.*, pp. 7-8.
- 28 W. J. Paulits, "Ambivalence in 'Young Goodman Brown,'" *AL*, Vol. XLI, No. 4 (Jan. 1970), p. 581.
- 29 *The Scarlet Letter* ("Centenary Edition"), p. 86.
- 30 カール・ヤスパース『悲劇論』橋本文夫訳 (東京, 昭40), p. 17.

“Faces” of Hawthorne’s Young Goodman Brown

Nobunao Matsuyama

In Hawthorne’s “Young Goodman Brown” nothing is said about Brown’s face and his features. Obviously Brown has some faces to identify him with—faces which are metaphorical and which derive from the situations he is in. For example, his is the reversed face of Hilda of *The Marble Faun*. Both Hilda and Brown are narrow-minded puritans and do not comprehend the ambiguity of good and evil. But Hilda has a “hopeful soul” and is surrounded by the “white,” while nobody carved a “hopeful verse” on Brown’s tombstone as “his dying hour was gloom.” This is because of the difference of their belief and moral chastity. Another face of Brown’s that has escaped critics’ notice is a face of mother’s child. When Brown approached the alter of Black Sabbath in the heart of the midnight wood “the smile of welcome gleamed darkly on every visage” with one exception. A woman, who seemed to be his mother, “threw out her hand to warn him back.” This suggests, together with Brown’s dependence on his wife Faith and Goody Cloyse as extensions of mother, that he is a child who failed “to grow up, in the sense of becoming emotionally mature.” Hence the intensity of his distrust in what were once his authorities, including his wife, Goody Cloyes, the Deacon and the minister.

Brown has other faces given by the historical situation of the story, which is set in Salem Village in the year of witchcraft delusion. Minor details of this tale have already been corroborated to be derived from

various witch's legends and the records of Salem witchcraft trial, and the use of "specter" in Brown's experience in the wood has been established by David Levin. But Brown's frame of mind—suspicion and distrust of other villagefolks—reveals the face of the residents of the Salem Village who were driven into the suspicion that their neighbors might by some possibility be witches or the Devil's agents.

More importantly, the historical situation of this work gives our hero a face of a third-generation Puritan in the age of "declension" of Puritanism. Leaders of the Puritans in the last quarter of the 17th century had to insist on the necessity of reformation as Increase Mather did in 1679. People were, as they seemed to the leaders, much reduced in religious ardor and moral chastity. Brown made a promise with the Devil to meet in the wood and he did go knowing his purpose was "evil." And yet, he believed that he had faith in God and thought he would be excused and saved finally even if he committed sin only for once. Brown is a typical third-generation Puritan.

Still he is a Puritan and as such he is very much afraid of evil in others and "stern" towards others just as Hilda was. The irony of Brown is that since he could not wholly accept one of the Devil's promises that "evil must be your only happiness" he was not completely initiated into the world of the Devil as Goethe's Faust was. Hence his inability to acquire the "tragic vision" and to comprehend the ambiguity of good and evil. To the end of his life he was "horror-stricken" with the "revelations" given to him in the wood as a result of his own indulgence in evil. Brown's final face is the gloomy face of a pseudo-Faust.